

# 通所介護利用高齢者へのアート作業の取り組みと研究活動報告

竹原 優<sup>1)</sup>, 山口 治隆<sup>2)</sup>, 永廣 信治<sup>3)</sup>, 田中 佳<sup>4)</sup>, 谷 憲治<sup>5)</sup>

1) 徳島大学医学部医学科 2) 徳島大学大学院 総合診療医学分野

3) 介護老人保健施設敬愛の家 4) 徳島大学大学院 社会産業理工学研究部

5) 徳島大学病院 総合診療部

## これまでの経緯

発表者らはこれまでマスキングテープを用いて徳島県内の医療機関等にアート作品を作る活動を行ってきた。ホスピタルアートは、無機質になりがちな病院等の空間を快適なものにし、病院利用者や職員の精神面に良い作用が生まれると考えられている。そのことが、間接的に治療等の効果の向上につながるなどの報告もなされている。

発表者らが用いてきたマスキングテープとは、元々は塗装の際に塗装箇所以外を汚さない目的で用いられる保護用の粘着テープであり、現在では装飾やラッピングなどにも幅広く用いられている。本来アート制作用の素材ではないが、以下のような特徴がホスピタルアートに用いるのに適していると考え、マスキングテープによる壁画等を制作してきた。

## マスキングテープアートの特徴

マスキングテープの特徴は次の通りである。

- ・原状復帰が容易
- ・制作者の手が汚れない
- ・臭いが無い
- ・省スペースで制作が可能
- ・誰でも容易に安全に扱える
- ・フィルムやクッキングシートを併用することで机上での作業も可能になり、コロナ禍での現場の制作作業短縮



作成の様子

## 研究概要

先行研究

マスキングテープによるアート作業が認知機能や意欲の向上、握力などの運動機能向上で総合的に脳機能を改善する可能性の報告。(1)(2)(3)

今回の研究

通常のレクリエーションに比べてどれほど優れているのかを比較解析するため RCT を行う。



被験者による制作の様子



完成作を組み合わせ制作した壁画

被験者は一人一人に与えたフィルム上でアート制作作業を行う。  
本研究の主旨は被験者自身がマスキングテープを用いて作品を作成することであるが、副産物として被験者らが作成した作品を研究者らが一つの大きな作品に統合して展示を行う。

## 研究方法

研究デザイン：ランダム化比較試験

介入方法：アート群は通所介護の通常プログラムにアートの作業を加える。

アート制作作業の介入は 1 日 30 分、週に 2 回を原則とし、3ヶ月間（計 24 回）

予定症例数：40 名（アート群 20 名、コントロール群 20 名）<sup>(4)</sup>

症例登録方法・割り付け方法：対象施設の高齢者の中から、アート作業に参加したい希望者を募る。本研究では年齢、性別、認知機能により層別ランダム化を行う。<sup>(5)</sup>

層別ランダム化に用いる項目

年齢：75 歳以上 90 歳未満 or 90 歳以上

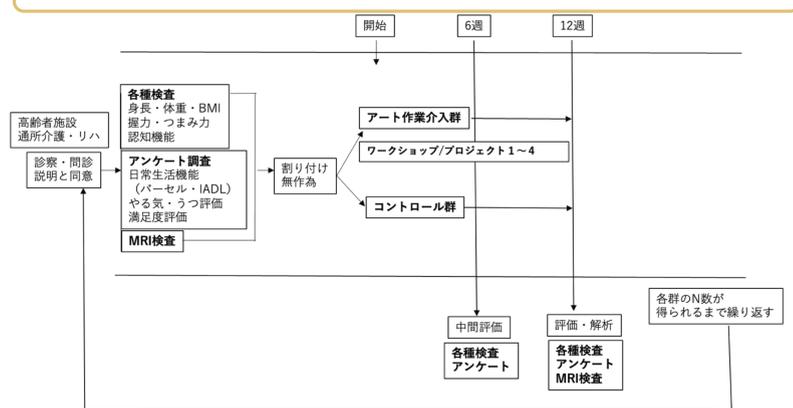
性別：男性 or 女性

認知機能：改訂版長谷川式簡易認知機能評価スケール 21 点以上 or 20 点以下

## 評価項目

改訂版長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R)・握力・つまみ力 (ピンチ力)・Barthel index・Lawton の IADL 評価度 vitality index・老年期うつ病評価尺度 (GDS15) Lawton の心理的幸福尺度 (幸福度)・脳 MRI

※HDS-R：認知機能スクリーニング検査  
Barthel index：被介護者が日常生活の中で「できる ADL」を評価するもの  
Vitality index：意欲の指標  
GDS15：老年期うつ病評価尺度  
Lawton の心理的評価尺度：Lawton の論文をもとに、Rentz C.A. が作成したものを日本語に翻訳して用いた。<sup>(6)(7)</sup> 質問票各項目の得点が上昇すれば幸福度が上昇したと考えることができる。



## 結果

現時点の被験者は 17 名（目標数は 40 名）で 3 名の被験者が離脱した。その理由は入院治療やアート作業の拒否であった。被験者は、当初アートの作業に躊躇がみられたものの、数名のグループで作業を進めていくにつれて、徐々に作業に慣れ集中して取り組むようになった。COVID-19 感染者の発生などにより、度々作業の中断がみられスケジュールの変更や延長などを余儀なくされたが、計画したアート作業を最後まで行うことができた。これまでの解析結果 (n=17) では、アート群で握力やピンチ力、幸福度評価やうつ評価、日常生活機能の一部で向上がみられている。

## 結論

マスキングテープを用いたアート作業は、高齢者の機能を向上させる可能性が示された。今後参加例を増やし解析を進めることで、新たなエビデンスを得たい。

## 振り返りと今後の展望

- ・高齢者は抽象的な課題よりも具体的な課題の方が取り組みやすい。
- ・参考図版はある方が良い。
- ・被験者の作品を統合して展示することが施設内でのコミュニケーションにつながる。

今後について

- ・目標被験者数である 40 名に達するように研究を続ける。

謝辞

本研究を行うに当たって、ご協力いただいている施設スタッフの皆様に感謝申し上げます。



完成作を組み合わせ制作した壁画

1) Nagahiro S, et al. Masking tape art-work may provide beneficial positive effects. Edelmetw J Biomed Res Rev. 2021; 117(3): 5-8. 2) 田中 佳. 健康と癒しの両立を目指して - 徳島大学病院におけるマスキングテープアートの試み (2018 年度)、アートミーツケア. 2020; 11: 55-66. 3) 田中 佳. ホスピタルアートの普及を目指して - 徳島の医療・福祉施設におけるマスキングテープアートの広がり、アートミーツケア. 2021; 12: 01-11. 4) Franz F, et al. G\*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. Behav Res Methods. 2007; 39: 175-191. 5) 前田 晋至. ランダム化比較試験における自動割付を行うフリーソフト (randMS) の開発研究. 日本統計学会誌. 2016; 1: 1-9. 6) Rentz CA. Memories in the Making: Outcome-based evaluation of an art program for individuals with dementing illnesses. Am J Alzheimers Dis Other Demen. 2002; 17: 175-81. 7) 川久保悦子 他. 認知症高齢者のアートセラピーにおける介入評価と実践的方法の工夫. 日本認知症ケア学会誌. 2014; 13(2): 500-511.

筆頭演者、共同演者において、開示すべき利益相反 (COI) はありません。